

共同研究の概要と経過

福 田 ア ジ オ

1. 共同研究の目的と役割

今回の「日本民俗学方法論の研究」と題する共同研究は、国立歴史民俗博物館民俗研究部のスタッフによって提案され、組織されたものである。国立歴史民俗博物館は歴史学、考古学そして民俗学の三学の協業による新しい歴史研究を行う研究機関であるが、それと同時にそれぞれの学問研究においても一定の役割を果たすべき存在でもある。殊に、全国的に見た場合、民俗学に関する研究機関は少なく、また研究機関に所属する民俗学研究者もあまり多くない。そのため、民俗学の理論研究に専念する研究者ももちろん皆無に近いし、他の科学の研究者と共同研究を行い、議論をし、相互批判の過程から新しい理論水準を切り拓くという機会もそれほどないと言ってよい状況である。したがって、歴史学や考古学に比較しても、民俗学プロパーの問題、特に理論的問題について、歴博が共同研究を組織し、研究を展開させることの意義は格段に大きいのである。その意味で、歴博民俗研究部のスタッフも、また外部の民俗学研究者も、この「日本民俗学方法論の研究」に大きな期待を寄せたとと言える。

「日本民俗学方法論の研究」の共同研究は1986年度から3カ年計画で実施され、1989年3月に無事終了した。その当初の研究計画書には以下のようにこの共同研究の研究目的が記載されていた。

最近における日本民俗学の対象としての民俗・民間伝承の著しい変化を背景として、日本民俗学は都市民俗学、比較民俗学など、これまでにない新しい方法論や新しい研究分野を開拓しつつある。しかしながら、日本民俗学方法論については、従来柳田国男の提示した周圜論・重出立証法などの方法や常民、民俗、民間伝承などの概念が個別的に検討されることはあっても、これを総合的に検討する試みはみられなかった。本研究は、現実におこりつつある民俗事象の変化との緊張関係のなかで、現代を起点とした民俗を研究対象とする日本民俗学の方法論

共同研究の概要と経過

を、日本民俗学内部からの反省的検討を加えると共に、欧米民俗学および民俗学に関係する周辺諸科学の視点から総合的に検討し、日本民俗学理論の新たな構築を目指すものである。

この目的は民俗学が置かれた独自の状況を強調しているが、これは当時の民俗研究部の雰囲気を反映している。しかし、実際の研究過程は必ずしも民俗学プロパーの要求や問題に限定されるものではなかった。単に民俗学に止まらず、民俗を対象とする様々な研究の方法論として幅広く議論され、検討された。そのことは最初の共同研究員の組織化において先ず示されたことである。

2. 共同研究の組織

このような共同研究計画が館内で了承されたことにより、早速に共同研究員の依頼が行われた。その対象は民俗学内部に限定せず、むしろ民俗学外のさまざまな研究者に積極的に参加してもらうように努力した。その結果、歴史学、考古学、人類学等の研究者の参加を得ることができた。この共同研究に参加した研究者は以下の人々であった（所属は1989年3月現在）。

- 飯島 吉晴（筑波大学歴史人類学系・民俗学）
- 色川 大吉（東京経済大学・国立歴史民俗博物館客員・日本近代史）
- 大月 隆寛（民俗学）
- 倉石 忠彦（國學院大学文学部・民俗学）
- 蔵持不三也（早稲田大学人間科学部・フランス社会史）
- 甲元 眞之（熊本大学文学部・考古学）
- 小林 忠雄（石川県立歴史博物館・国立歴史民俗博物館客員・民俗学）
- 小松 和彦（大阪大学文学部・文化人類学）
- 近藤 直也（関西大学文学部・民俗学）
- 真野 俊和（上越教育大学学校教育学部・国立歴史民俗博物館客員・民俗学）
- 藤井 隆至（新潟大学経済学部・日本経済史）
- 宮田 登（筑波大学歴史人類学系・民俗学）
- 岩井 宏實（国立歴史民俗博物館民俗研究部・民俗学）
- 岩本 通弥（国立歴史民俗博物館民俗研究部・民俗学）
- 上野 和男（国立歴史民俗博物館民俗研究部・社会人類学）
- 小木 新造（国立歴史民俗博物館歴史研究部・日本近代史）

3. 研究会の開催

小島 美子 (国立歴史民俗博物館民俗研究部・日本音楽史)
篠原 徹 (国立歴史民俗博物館民俗研究部・植物民俗学)
塚本 学 (国立歴史民俗博物館歴史研究部・日本近世史)
坪井 洋文 (1988年6月死去・民俗学)
福田アジオ (国立歴史民俗博物館民俗研究部・民俗学)
橋本 裕之 (国立歴史民俗博物館民俗研究部・演劇学)
山折 哲雄 (国立歴史民俗博物館民俗研究部・国際日本文化研究センター・宗
教学)

このように総勢23名による共同研究であった。歴博の組織する共同研究としては異例に属する多人数であったが、これは歴博民俗研究部の専任スタッフおよび客員教官全員がこの共同研究に参加したためである。そのことは民俗研究部のこの共同研究にかけた意気込みをよく示していたと言えよう。特に、発足時の民俗研究部長であった坪井洋文氏のこの共同研究にたいする期待は大きく、中心的なメンバーとして活動されたが、研究のなかばで死去され、この成果を確認することができなかったことは痛恨の極みであると言わねばならない。

3. 研究会の開催

本共同研究は、フィールドワークによる調査研究を主とするものではなく、各研究員が民俗学の方法論に関する研究成果を持ち寄り、研究会で発表し、それをめぐって討論をすることによって、より深い認識に達することを主目的にしたものであった。研究の過程はすべて研究発表という形式をとり、それ以外の研究活動としてはそれに付随して民俗学の方法論に関連する文献の収集とその目録作成を行った程度である。その研究発表は、国立歴史民俗博物館の共同研究経費で研究した成果というよりも、各人がそれまで個別に研究し蓄積してきた理論的成果を披露してもらうという面があり、ある意味では虫のよい共同研究であった。しかし、参加者各人は熱心に報告を行い、自分の理論を討論の場に積極的に提出した。その研究会の経過を示せば以下の通りである。

第1回 1986年6月27日 会場 国立歴史民俗博物館
研究発表 塚本 学 「挑戦と応戦—常民・民衆像をめぐって」
福田アジオ 「日本民俗学方法論の課題」
第2回 1986年12月19・20日 会場 国立歴史民俗博物館

共同研究の概要と経過

- 研究発表 飯島 吉晴 「アメリカにおける『常民』概念の変容」
大月 隆寛 「民俗学と『経験主義』」
藤井 隆至 「柳田国男の社会主義論」
- 第3回 1987年3月18・19日 会場 大阪大学
特別講義 橋本 鉄男 「民俗学方法論研究についての提言」
研究発表 蔵持不三也 「フランス民俗学と歴史」
近藤 直也 「私の民俗学」
- 第4回 1987年6月26日 会場 国立歴史民俗博物館
研究発表 山折 哲雄 「方法としての『もどき』——折口信夫論——」
宮田 登 「『民俗学的歴史』の基準」
- 第5回 1987年8月31日 会場 国立歴史民俗博物館
研究発表 上野 和男 「方法論の三角形——ウエーバー・デュルケム・柳田国男——」
倉石 忠彦 「都市民俗学は成立したか」
- 第6回 1987年11月16日 会場 国立歴史民俗博物館
研究発表 岩本 通弥 「柳田国男の方法について——綜観・内省・了解」
甲元 眞之 「先史学と民俗学」
- 第7回 1988年3月11・12日 会場 神戸学生・青年センター
研究発表 真野 俊和 「ムラ起こしと民俗学」
特別講義 赤松 啓介 「1930年代の民俗学理論形成期の回顧」
- 第8回 1988年6月3・4日 会場 国立歴史民俗博物館
研究発表 岩井 宏實 「民具研究と民俗学」
篠原 徹 「自然誌的民俗誌の方法とその意義」
- 第9回 1988年7月1・2日 会場 国立歴史民俗博物館
研究発表 小島 美子 「民俗音楽学方法序説」
小松 和彦 「民俗学と民俗誌をめぐって」
大月 隆寛 「『都市』という問い」
- 第10回 1988年11月4・5日 会場 国立歴史民俗博物館
研究発表 橋本 裕之 「民俗芸能研究における『現在』」
小林 忠雄 「複製技術社会の民俗」
- 第11回 1989年2月25・26日 会場 会津若松市文化センター

研究発表 大月 隆寛 「それは『学問』ではない——民衆運動としての民俗学——」

色川 大吉 「宮本常一の方法—共同体を中心に」

特別講義 山口弥一郎 「私の民俗学方法論構想」

全部で11回の研究会はいずれもほとんど全員の研究員の参加出席のもとに、発表と討論が行われた。そして、発表者には容赦無く多くの質問が浴びせられ、また時には激論が闘わされた。そして、そのなかからそれまで十分に自覚していなかった自己の方法論の問題点を認識するようになった。11回の研究会のうち、各年度の最終回は会場を国立歴史民俗博物館外に設定して、特別講師をお願いし講義をしていただき、またオブザーバーとして共同研究員以外の研究者にも参加していただいた。これも今回の共同研究の特色としてあげることができよう。橋本鉄男(1987年3月)、赤松啓介(1988年3月)、山口弥一郎(1989年2月)の三氏である。いずれの方も独自の民俗学研究の方法・分野を開拓し、多大の成果を挙げてきた先駆者であり、その民俗学の内容を理論の形成過程に焦点をあてて報告してもらい、その努力の中身を学ぶと共に、理論上の問題点を把握するための企画であった。お願いをした3名の方はいずれもご高齢にもかかわらず熱心に長時間講義をしてくださり、いつも参加者一同感激したものである。改めてこの機会に3人の先達に深く感謝申し上げたい。また、その会にご出席くださり、種々質問やコメントを下された研究者の皆さんにもお礼を申し上げたい。

4. 成果の概要

本共同研究計画の具体的な目標は当初以下の二点であった。第一の目標は、民俗学理論を広い立場から批判的に検討するとともに、新たな理論形成のための建設的な議論をし、民俗学の理論水準を飛躍的に高めようとする点にあった。そして、第二の目標としては、従来は民俗学研究者の余技として行われてきた理論研究を民俗学研究の新しい一つの新分野として開発することにあった。以上の研究課題上の目標は、この3年間の共同研究を通じて相当程度達成できたと言ってよいであろう。殊に、主として柳田国男の民俗学方法論を縦横に充分検討することを通じて、旧来の民俗学理論のもっていた様々な問題点はほぼ明らかにすることができたものと考えている。

今回の共同研究で成果をあげた点としては、今までにない幅広い視点・立場から民俗学理論を検討したことである。民俗学内部での、互いに了解出来る範囲に限定した議論ではなく、歴史学、考古学、文化人類学等の関連諸科学との共通の場での率直な

共同研究の概要と経過

意見交換と議論は、民俗学研究者では気づかない多くの問題を発見することになった。すなわち、日本民俗学の理論上、方法論上のどこに問題があり、何が分かっているのかを共通の認識としてより明確に確認できた。民俗学内部での検討ではすぐに重出立証法であるとか、周圏論であるとかが問題になり、近代社会における民俗学形成の意味を問うこともなく、資料操作法だけを議論していた。今回の共同研究では、民俗学およびそのような民俗学の資料操作法が生み出された社会状況や思想も含めて全体として民俗学方法論を検討することができた。そして、日本の民俗学の開拓者である柳田国男の民俗学理論における実践性、重出立証法や周圏論の欧米理論からの影響と独自性、柳田国男の民俗学方法論と折口信夫の民俗学方法論との相違等について明らかにすることができた。

また、関連諸科学および欧米民俗学の今日の理論状況と、その理論上の諸問題について新鮮な情報を得ることができたとし、それらを民俗学の方法論との関係で幅広く検討することができた。たとえばヨーロッパ、特にフランスを中心に展開が見られる社会史の方法の特徴と民俗学との関連、アメリカにおける民俗学の近年の動向、考古学と民俗学の関連等の報告と検討は新鮮なものであった。

この3年間の共同研究に参加した各人は、これらの報告と討議を通して新しい認識、新しい知見を獲得することができた。それは今後の各人の個別の研究のなかで示されることとなるが、取り敢えず今回共同研究が終了するにあたり、成果の一端を論文としてまとめ研究成果報告書としてここに刊行することにした。報告書としては、研究会の内容を整理して、大きく二つの編で構成した。第1編は「民俗学史のなかの方法論」として、柳田国男はじめ民俗学理論の形成に努力してきた諸先学の理論、方法の検討に重点を置いた報告論文を収録した。そして、第2編は「現代の課題と方法論」とし、現代社会における民俗学の意義、役割、課題に比重を置いた諸論文を取めた。いずれも共同研究の成果としての報告論文であるが、全体として統一した編成のもとでの分担執筆ではない。各人が共同研究に参加することで獲得した認識、知識を生かして自己の問題意識に沿って課題を設定し自由に執筆したものである。この研究が、思想とか認識に深く係わる研究であった以上当然のことと言わねばならない。論文間に矛盾や対立があるが、それは研究会での議論を率直に反映したものである。

本書は、以上のような経過から生み出された報告書である。ご多忙の中、歴博の要請に快く応じて共同研究に参加し、ここに報告論文をお寄せくださった研究員の皆様に深く感謝申し上げたい。ただ大変残念なことは、参加した研究員のうち何名かの方には諸般の事情で執筆していただけなかったことである。